

# 甲虫ニュース

Aug. 1980

No. 50

## COLEOPTERISTS' NEWS

日本産テントウムシダマシ科概説(2)

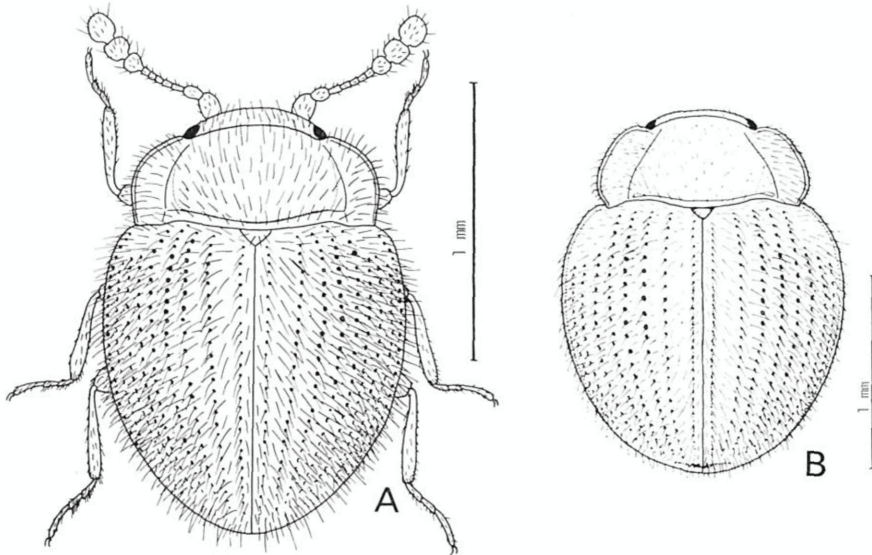
佐々治寛之

Genus *Idiophyes* BLACKBURN, 1895 コマルガタテントウダマシ属

上翅に明瞭な点刻列があるのが特徴である。前背板基縁がほぼ直線状である点で、*Clemmus* HAMPE, 1850 や *Exysma* GORHAM, 1891 に近縁と思われるが、触角節数や跗節数が異なるので区別しておいた方がよいであろう。現在までに12種が知られ、アジア、オーストラリア、ニューギニア、アフリカ等に広

くても容易に区別がつく。本州、四国、九州に分布。中国からの分布記録があるが、果して同じ種かどうか疑問である。最初 *Symbiotes* 属として記載され、前種と共に ARROW (1920) は *Exysma* 属に移し、STROHECKER (1953) によって初めて、*Idiophyes* 属に移された。

6. *Idiophyes boninensis* SASAJI, 1978 オガサワラマルガタテントウダマシ(新称)(第4-B図)



第4図 A: *Idiophyes niponensis* GORHAM コマルガタテントウダマシ;  
B: *I. boninensis* SASAJI オガサワラマルガタテントウダマシ

く分布する。日本からは次の2種が知られている。

5. *Idiophyes niponensis* (GORHAM, 1874)

コマルガタテントウダマシ(第4-A図)

短卵形、1.3~1.8mm、黄褐色~赤褐色、上翅には明瞭な点刻列がある。体形も前掲4種に比べてややヒサゴ形をなす点や、前背板基縁がほぼ直線状な

前種に極めて酷似するが、前背板側縁が強く弧状になること、側溝がより強く前方に狭まること、その内分枝が短いことなどで区別できる。体長1.5~1.8mm。小笠原諸島特産で父島から記録された。中根(1970)が小笠原から記録した *Idiophyes* sp. は本種と同一種であろう。

Genus *Asymbius* GORHAM, 1896 セスジテントウダマン属

上翅の小柄板わきから会合線にそって極めて明瞭な1対の条刻があり、肢は細くかつ長く、跗節は前肢において3節、中・後肢において4節となり、その他多くの点で特異な属である。Mychotheninae亜科とされる他の属とは、かなり異質のものと思われるが、中基節窩の状態は、側方に閉じたタイプであり、他の形質においても共通点が多く、一応この亜科の範囲に含めてもよいと思われる。詳細な系統関係については今後の研究に譲りたい。東南アジアに分布し、9種が知られており、そのうち、次の1種がトカラ群島から記載された。なお、近縁の属 *Coryphus* CSIKI, 1902 がニューギニアから知られている。

7. *Asymbius foveicollis* CHÛJÔ et KIUCHI, 1974 トカラセスジテントウダマン (新称) (第5図)

体形は図に示したような卵形、体長約1.5 mm、背面は黄褐色で細毛を疎生する。邦産他種とは属の所で示したように体形で直ちに区別出来るが、台湾から記載された *A. formosanus* CSIKI, 1937 と良く似ているようである。トカラ群島中之島から知られ、枯れたバナナ樹幹から採集されたという。木内盛郷氏の御好意で1♀を検査することが出来た。記してお礼申し上げる。

久松ら (1973) は淡路島から *Geoendomychus* sp. なる種を記録したが、恐らく、この亜科 (*Asymbius* を除く) のいずれかと思われるが、標本を実検するまでその異同を確かめることは出来ない。

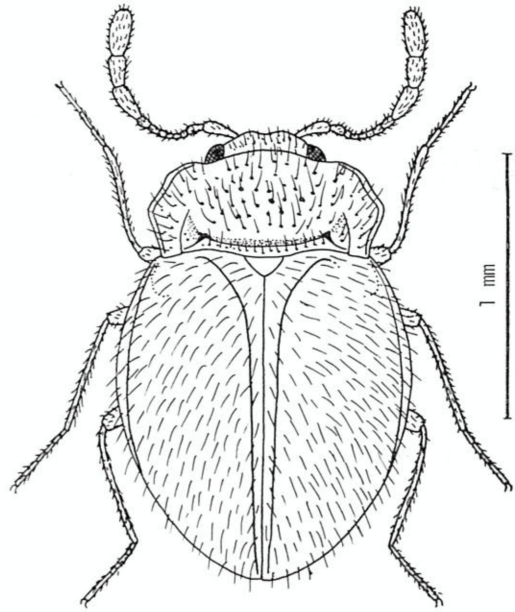
Subfamily MYCETAEINAE

ホソテントウダマン亜科

貯穀害虫を含む *Mycetaea* STEPHENS, 1830 を模式属として、多くの属を含むが、跗節が3節又は4節から成り、基部2節は先方へ伸張せず、4節の場合第3節は微小でないこと、いずれも小形であることが他の多くのテントウダマン科との区別点とされて来た。STROHECKER (1953) は34属をこの亜科に所属させているが、そのうちの一部は既に述べたように、MYCHOTHENINAE 亜科として分けられるべきもので、残りも必ずしも祖先型を共通するとは考え難いものを含んでいる。そのすべてを検討するだけの材料を持合せていないが、日本やヨーロッパに産する *Mycetaea* (本亜科の模式属)、*Leistes*、*Panamomus* を精査した限りでは、中基節窩や頭蓋膜状骨の状態は一般のテントウダマン科と同様なタイプで、*Mychothenus* などとは明らかに異なっている。欧米の伝統的分類体系で、この亜科を *Mycetaeini* 族と *Leistini* 族に分ける方を踏襲すると、後者の *Leistini* だけが日本に産することになる。

Tribe *Leistini* ホソテントウダマン族

体は長卵形で、背面はやや膨隆し、光沢があり、被毛があってもまばらである。触角窩は眼の前方にある。中胸腹板は比較的長く、1対の縦隆線がある。



第5図 *Asymbius foveicollis* CHÛJÔ et KIUCHI  
トカラセスジテントウダマン

跗節は各肢共4節から成る。触角は11節。日本から次の2属が知られる。

日本産属への検索表

- 1(2) 前基節は突出し、左右ほとんど相接する。前背板側溝は幅広く、側溝と側縁の間の後角付近は強く陵状に隆起する。後胸腹板は中胸腹板よりずっと長い ..... *Leistes*
- 2(1) 前基節の突出は弱く、左右は離れる。前背板側溝は細く明瞭で、その外側は線状の隆線を有し、側縁との間は平坦。後胸板は中胸腹板と同長か僅かに長い ..... *Panamomus*

Genus *Leistes* REDTENBACHER, 1845 イツホソテントウダマン属

細長く小形のテントウダマンで、*Panamomus* とは検索表に示したような特徴で区別され、ヨーロッパに1種、コーカサスに1種、日本に1種産する。

8. *Leistes decoratus* (GORHAM, 1887) イツホソテントウダマン (第6-A図, 原色大図鑑 pl. 107-24)

黄褐色地に黒紋があり、背面は光沢をもつ美しい種である。体長約2.5 mm。前背板に3個の黒紋が横に並ぶが、ほとんど全体黒色になることもある。上翅の斑紋は側方の中央前後に2対、会合線部に縦長の大紋、合計5個あるのが普通であるが、これも拡大して互いに融合することがある。本州、四国、九州に分布する。*Panamomus* 属として記載されたが、STROHECKER (1953) により、*Leistes* 属に移された。



Genus *Panamomus* GORHAM, 1873 ホソテントウダマン属

1873年に日本産 *lewisii* に対して作られた属で、1887年に2種を追加したが、そのうちの1種は、のち、*Panamomus* 属に移された。最近、木内(1972)はさらに1種を追加した。既知種3種はいずれも日本産で、日本固有の属である。

日本産種への検索表

- 1(2) 前背板側溝及びその外方隆線は顕著で、前背板の長さの1/2近くに達する。上翅の会合線に沿って顕著な縦溝があり、翅端近くに達する。背面には顕著な斑紋を欠く………*lewisii* GORHAM
- 2(1) 前背板側溝及び隆線は短かく、前背板の長さの1/3に達しない。上翅の会合線に沿う縦溝はほとんど認められない。背面は淡色地に黒斑を有することができる。
  - 3(4) 前背板側縁は平滑。上翅の点刻は粗大。背面は比較的扁平で、丸みが弱い。黄～赤褐色地に第6-C図のような顕著な黒斑がある ……………  
……………*brevicornis* GORHAM
  - 4(3) 前背板側縁には、各8～12個の微細ではあるが顕著な歯突起があり、それぞれの突起の先端に1小毛を生ずる。上翅の点刻は細小。背面は丸味が強い。黄～赤褐色で、前種に似た不鮮明な黒斑を有することもあるが、時には全く無紋……………  
……………*yoshidai* KIUCHI

9. *Panamomus lewisii* GORHAM, 1873 ルイステントウダマン (第6-B図)

背面の色彩は変化に富み、黄褐色のものから、全体黒褐色のものまでであるようである。肢と触角は淡

黄色。2.1～2.5 mm。長崎(原産地)、熊本、徳島県高越山(木内, 1966)から記録されており、高倉康男氏の御好意で福岡県英彦山の標本を検した。珍しい種と思われる。

10. *Panamomus brevicornis* GORHAM, 1887 ホソテントウダマン (第6-C図)

前種に比べると細形で、丸みが弱く、背面は粗大点刻を有するほか、検索表に示したような特徴で容易に区別出来る。体長 2.3～2.5 mm。図示したように顕著な黒斑がある。原色大図鑑(1963)で初めて図示された。原産地は箱根宮の下で、ここに用いた標本は木内盛郷氏の御好意による徳島県産である。

11. *Panamomus yoshidai* KIUCHI, 1972 キウチテントウダマン (新称) (第6-D図)

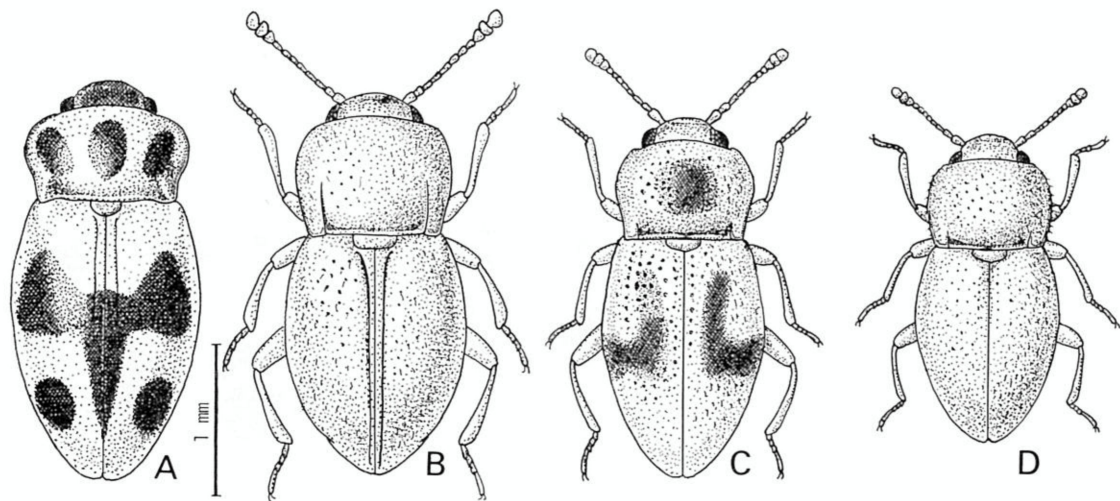
体形は *lewisii* に似るが、前背板側溝の状態や、上翅会合線縦溝の有無は *brevicornis* に近い。前背板側縁の小歯状突起は良い区別点である。体長 2.0～2.3 mm。原記載に図示された標本は、前種に似た不鮮明な黒斑があるが、木内氏の御好意によって得た2頭は全体黄褐色で全く無紋である。現在のところ、徳島県剣山だけが既知産地である。

Subfamily TROCHOIDEINAE

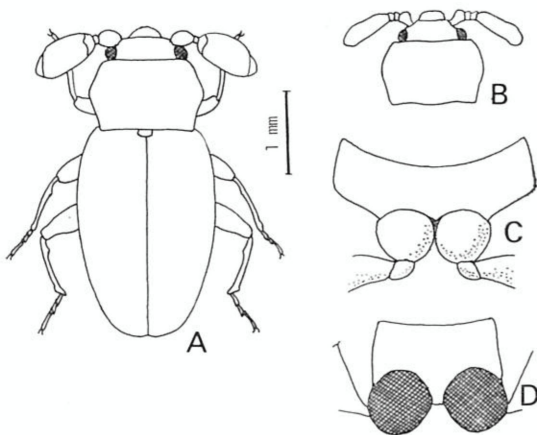
ヒゲトテントウダマン亜科

この亜科の最も顕著な特徴は著しく肥大した触角で、4～5節から成り、その4節目が肥大する。体形は長卵形。跗節は4節で、いずれの節も先方に伸長しない。3属が知られ、下記の1属が日本に産する。肥大した触角は蟻又は白蟻との共生適応形質とされる。

Genus *Trochoideus* WESTWOOD, 1833 ヒゲトテントウダマン属



第6図 A: *Leistes decoratus* GORHAM イソホソテントウダマン; B: *Panamomus lewisii* GORHAM ルイステントウダマン; C: *P. brevicornis* GORHAM ホソテントウダマン; D: *P. yoshidai* KIUCHI キウチテントウダマン (すべて同率拡大)



第7図 *Trochoideus desjardinsi* GUÉRINMÉNEVILLE  
ヒゲブトテントウダマン  
A: ♂; B: ♀, 頭胸部; C: 前胸腹板;  
D: 中胸腹板

前背板の後角が棘状に突出したり, 中央に縦溝があったりしないことで, 同亜科の2属から区別される。現在までに18種が記載されており, 世界の熱帯地方に広く分布する。小笠原諸島が我が国に復帰したので, 日本のファウナに次の1種が加わった。

12. *Trochoideus desjardinsi* GUÉRINMÉNEVILLE, 1838 ヒゲブトテントウダマン (第7図)

長卵形で, 背面は弱く膨隆し, 短毛を密生する。淡黄色(恐らく羽化直後のもの)~黒褐色。体長3~4 mm。雌の触角は雄よりも細い。東アフリカ, マダガスカルから東南アジア各地, フィリッピン, ミクロネシアにかけて広く分布し, 日本では小笠原群島(父島・母島)に生息する。蘭嶼から記録されているが台湾本島からの記録はないようである。アリの巣に生息することが報告されている。

Subfamily STENOTARSINAE

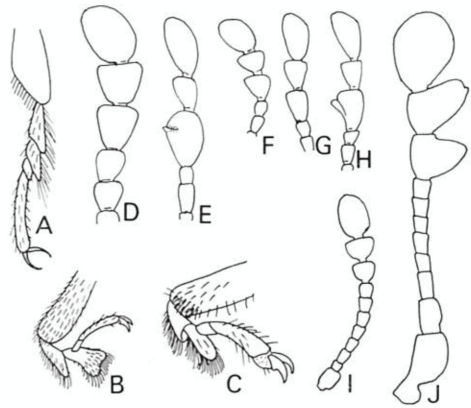
ムクゲテントウダマン亜科

背面は一部の例外を除いて短毛で密に被われている。中舌が横長である点は次の EUMORPHINAE 亜科と共通であるが, 前背板前縁に発音器を持っていない。跗節は4節から成るが第3節は微小で, いわゆる偽3節(=隠4節)を示し, 第2節は一部の例外を除き先下方に拡張し, その下面は微毛が密生する。STROECKER (1953) は20属をここに含めたが, その中の *Mimolithophilus* ARROW, 1920 と *Monocoryna* GORHAM, 1885 はテントウムシ科に移し

た方がよさそうである。5属が日本に産する。

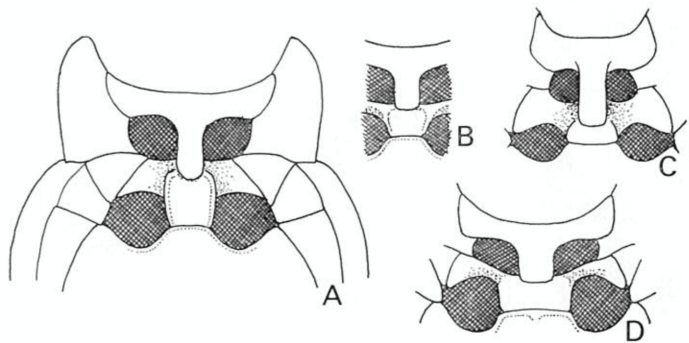
日本産属への検索表

- 1(2) 前背板側縁は極めて狭く縁取られる。中胸腹板<sup>1)</sup>は縦長(第9-A図).....*Saula*
- 2(1) 前背板側縁は幅広く縁取られ, その縁取りの部分は平坦。
- 3(4) 中胸腹板は縦長で, その前縁はえぐられない.....*Danae*
- 4(3) 中胸腹板は横長で, その前縁は前胸腹板突起を受入れる凹みとしてえぐられる。



第8図 A~C: 中肢跗節; D~J: 触角。

A: *Chondria formosana* SASAJI; B: *Saula japonica* GORHAM キイロテントウダマン; C, J: *Ectomychus basalis* GORHAM カタベニケブカテントウダマン; D: *Danae shibatai* NAKANE オニダナエテントウダマン; E: *D. castanea* SASAJI カバイロダナエテントウダマン; F: *D. orientalis* GORHAM トウヨウダナエテントウダマン; G: *D. denticornis* GORHAM オオダナエテントウダマン♀; H: 同じく♂; I: *Sterotarsus chrysolinus* GORHAM チャバネムクゲテントウダマン



第9図 前・中胸腹板(腹面図)。A: *Saula japonica* GORHAM キイロテントウダマン; B: *Ectomychus basalis* GORHAM カタベニケブカテントウダマン; C: *Stenotarsus chrysolinus* GORHAM チャバネムクゲテントウダマン; D: *Ectomychus musculus* GORHAM クロモンケブカテントウダマン



- 5(6) 跗節第2節は円筒形で、下面はやや先方へ伸びるが拡張しない(第8-A図)。前胸腹板突起は長三角形で、縦隆線で縁取られる……………*Chondria*
- 6(5) 跗節第2節は先下方に強く拡張する(第8-B)。前胸腹板突起はほぼ平坦。
- 7(8) 触角第9・10節は内方に強く拡張しほぼ三角形(第8-J図)。前胸腹板突起の先端は前基節の後端をわずかに越える(第9-B, D図)。前背板の側溝は線状で、横溝を欠く……………*Ectomychus*
- 8(7) 触角第9・10節はほぼ相称(第8-I図)。前胸腹板突起の先端は前基節の後端を明らかに越える(第9-C図)。前背板側溝は深く点状かまたは横位で、多くの場合横溝は明瞭……………*Stenotarsus*

注1) 中胸板は、中央の突起部と、落込んで側方に伸び、中基節高の前縁をなす部分から成るが、記載文では通常中央の突起部だけをさすことが多い。

Genus *Stenotarsus* PERTY, 1832 ムクゲテントウダマシ属

全世界の暖地に広く分布し、約250種を含む大属で、そのうち62種がアジアに産する。多くは幅の広い楕円形でやや扁平、背面は軟毛で密に被われ、斑紋に富むものがある。模式種はブラジル産の *S. brevicollis* PERTY, 1832。CSIKI (1900) はアジア産のものを *Stenotarsoides* 属として分けたが、ARROW (1920) が指摘したように分離する根拠は見当らない。日本から4種が記録されている。

日本産種への検索表

- 1(4) 前背板は黒色。上翅は赤褐色。  
2(3) 脛節及び触角先端節は黒色。上翅は明瞭な

- 点刻列があるが深く溝状でなく、間室は明瞭に点刻される。前背板前角は角ばる。九州以北……………*chrysomelinus* GORHAM
- 3(2) 脛節及び触角先端節は暗赤褐色。上翅列は深く著しく、間室の点刻は微弱。前背板前角は丸味を帯びる。トカラ群島……………*nakanoshimensis* NAKANE
- 4(1) 前背板は淡色。  
5(6) 上翅は黒色で会合線部と周縁部が赤褐色……………*internexus* GORHAM
- 6(5) 上翅は黄褐色で暗色部をもたない……………*ryukyuensis* CHŪJŌ et KIUCHI

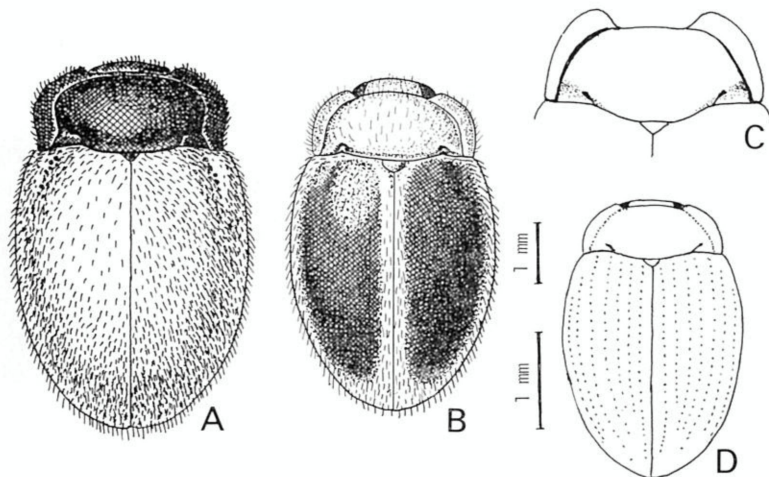
13. *Stenotarsus chrysomelinus* GORHAM, 1887 チャバネムクゲテントウダマシ(第10-A図) 黒色で、上翅と腹部が暗赤褐色。体長3.8~5.0 mm。黄褐色の被毛をもつ。分布: 本州, 四国, 九州。

14. *Stenotarsus nakanoshimensis* NAKANE, 1959 トカラムクゲテントウダマシ(原色昆虫大図鑑107-18)

前種に酷似するが、検索表に示したほか、前背板がより幅広いことで区別される。体長3.7~4.5 mm トカラ群島中之島から採集されている以外に報告がない。

15. *Stenotarsus internexus* GORHAM, 1887 クロスジムクゲテントウダマシ(第10-B図)

全体赤褐色で、上翅はちょうどベニヘリテントウのように黒色で、各翅の周辺部が赤褐色、触角の基部と先端節の先半分を除き黒褐色の美しい種である。体長3.3~3.8 mm。模式産地は長崎及び柏木で中条(1939)はタイプシリーズの一部を用いて図示した。その後、谷口和義(=黒佐)(1942)は兵



第10図 A: *Stenotarsus chrysomelinus* GORHAM チャバネムクゲテントウダマシ; B: *S. internexus* GORHAM クロスジムクゲテントウダマシ; C-D: *S. ryukyuensis* CHŪJŌ et KIUCHI キイロムクゲテントウダマシ (Cは前背板) (短いスケールはD, 長いスケールはその他に適用)

庫県本山村, 神戸市から記録したが珍しい種とみえてその他の採集記録を聞かない。ここに図示した標本は神戸市摩耶山産(4. iv. 1938, 黒佐採集, 木内盛郷所蔵)である。

16. *Stenotarsus ryukyuensis* CHŪJŌ et KIUCHI, 1974 キイロムクゲテントウダマン(第10-D図)

黒色の触角を除き全体黄褐色で, 肢など部分的に暗褐色, 背面は淡黄褐色の細毛で密に覆われる。卵形で, 背面中央部は強く膨隆する。体長 3.5~5.0 mm。前背板基縁中央部は全く単純で横溝を有しない点で, 他の本属の種と異なり, 将来その所属の検討を要するかもしれない。この種は太田勇愛(1931)が最初ペルマ原産の *S. peguensis* GORHAM, 1896 と同定して沖縄から記録したが, 真の *peguensis* とは明らかに異なるとして, 上記のように命名記載された。分布: トカラ群島, 奄美大島, 沖縄。

Genus *Chondria* GORHAM, 1887 アンボンテントウダマン属(改称)

日本産の *lutea* を単一模式種として, “*Stenotarsus* に似た点もあるが, *Symbiotes* により近縁” だとして新属が設定され, CSIKI (1905) も *Mycetaeinae* 亜科の属として取扱っているが, ARROW(1920)

は *Stenotarsus* に極めて近縁であることを指摘し, 同時に東南アジアから新種を追加した。現在42種が知られており, インドから日本にかけて, ニューギニアに分布が限られている。模式種の標本は見えないが, この属の最も重要な特徴は跗節にある。すなわち, 第2節が他の多くのテントウダマン科のように下先方に拡張しない。しかし, 下面が伸びて第3節を越し, 第3節が微小である点は, *Mycetaeinae* 亜科のものとは基本的に異なっている(第8-A図)。前背板や中胸腹板の形状は *Stenotarsus* とほとんど変わらないが, 前胸腹板は私の見た材料に関する限り特異である。日本から1種だけが知られている。

17. *Chondria lutea* GORHAM, 1887 キイロアンボンテントウダマン(改称)

長崎産の2頭によって記載され, 中条(1939)は標本を入手できず原記載を訳出するにとどめている。体長 2.25 mm。幅の広い楕円形で, 黄褐色, 触角は赤色, 前背板の側溝は前背板長の半分ほどで, 横溝は明瞭で両側は小孔に終る。模式標本以外に採集例は全くないようで, 図示されたこともない。もし, それらしい標本をお持ちでしたら是非拝見させて欲しいものである。(福井大学)

○山梨県韮崎市のキボシカミキリ

今年(1980)7月6日に山梨県韮崎市穂坂の桑畑でキボシカミキリ *Psacotha hilaris* PASCOE 4♂♂ 2♀♀ を採集したが, これらは全部前胸背の側紋が2分する西日本型で, 2分せず条紋となるいわゆる東京型ではなかった。これらは桑についている点などから土着のものと考えられるが, 山梨県の北西部にはやはり西日本に多いオオオサムシ *Carabus (Ochomopterus) dehaanii* CHAUDOIR が分布していて, その分布の東限となっていることと併せて興味深いので報告する。(日野市, 中村芳樹)

○ムシヤミヤマカミキリ台湾北部の記録

ムシヤミヤマカミキリ *Neocerambyx (Hemadidius) oenochrous* FAIRMAIRE は, チベット, ラオス, 中国中南部, 台湾などに分布し, 台湾ではその名の示すように, 中部の霧社とその周辺地域から主に採集される大型で美しいカミキリムシとして有名である。成虫は4月下旬から5月上旬にかけて多く出現し, その頃には同地方の食樹(サクラ, スモモ等)から見出す事ができるが, 近年は個体数が激減し, 台湾における他の地方からの採集例もあまり聞かない。しかしながら筆者らは, 下記の如く本種を得ているので記録しておきたい。

1♂, 台湾省桃園県上巴陵, 27. vi. 1979, 境野広行, 楠 嘉博採集。

上巴陵から拉々山へ向う途中の路上で死骸を拾ったものであるが, 触角の長さ 11.5 cm の大型な個体であった。本種はこのように, 少ないながらも中部から北部にかけて, 意外に広く分布しているのかもしれない。(東京農大, 境野広行・楠 嘉博)

○スギノアカネトラカミキリを町田市内で採る

最近, スギノアカネカミキリ *Anaglyptus subfasciatus* PIC の異常発生によるスギヤヒノキの被害が報ぜられているが, 東京近郊ではそれほど個体数の多い種ではないようで, 採集例を聞かない, たまたま筆者は自宅に飛来した本種を採集したので記録しておく。

1頭, 東京都町田市成瀬台, 1. vi. 1980, 筆者採集。(東京農大, 渡辺泰明)

○リュウキュウコクワガタ雄の記録

リュウキュウコクワガタ *Macrodercus okinawanus okinawanus* NOMURA は沖縄で得られた1♀♀ をもとに, 故野村鎮氏が

コクワガタの亜種として記載されたもので, 後に黒沢良彦博士により, 独立種と認められた。しかし, 原記載以後雄の記録は見あたらない。筆者は1979年夏に沖縄を訪れた際, 小型のオス個体を得ることが出来たので, 標本写真を付して記録しておく。形態的には本種の奄美大島亜種 *Macrodercus okinawanus amamianus* NOMURA と大差はないが, 上翅の光沢はより強い。

1♂, 10. vii. 1979, 沖縄本島国頭村辺野喜川流域, 岡島秀治採集。(東京農大, 岡島秀治)





## アオカミキリ備忘録(1)

黒沢良彦

蒐集家の中にはアオカミキリ類の愛好家が多い。あの金属光沢のある美しさに惹かれるのであろうか。私もその一人としてひそかに機会あるごとにその標本を殖やして来たが、種名を調べる段になると、どうしても考え込まざるを得なかった。学名の混乱と虚偽の報告の多さは目に余るものがあるからである。幸か不幸か、私の勤務する国立科学博物館には故鹿野忠雄博士の蒐集された甲虫標本があり、多くの模式標本を含んでいるが、その中には後述する様に問題となる標本が多い。従って、これらの標本を再検討し同博士の業績の中の誤りを少しでも正しておくべきではないかと考える。そこで、以下に備忘録の形でアオカミキリ類の中の思いついたものから順次私の意見を述べて行きたいと思う。

しかし、私の意見を述べようとして、はたと当惑することになった。他にもない、いわゆる「素木標本」が存在するためである。この標本の由来とその経過を知らなくては、鹿野博士を始め、多くの甲虫学者によって惹起された台湾の甲虫界の混乱を説明することはできない。この事実については、かつて中条道夫博士が私に、「素木博士の存命中にはこれについて何も書くことはできないが、博士が亡くなればたらその詳細を発表しよう」と語られたことがある。だが、素木博士が亡くなられてからすでに10余年にもなるのに中条博士はこのことについて何も述べようとされる気配はない。上述の通り、「素木標本」に言及することを避けて台湾の甲虫相に言及することは不可能である。従って、その概要を知らずに、台湾から記録された種類をそのまま取捨選択することなく信用すると大きな誤りを犯すことになるが、最近、この事実を知らずに、誤った報告をする例が現れたので、この機会に、私だけが悪者になって、私の知り得た「素木標本」の由来とその経緯について述べることにした。以下述べることは、大体において誤りはないと確信してはいるが、当事者ではないので、あるいは多少の誤りがあるかも知れない。しかし、これらはいずれ中条道夫博士かあるいは他のどなたかが訂正して下さるであろうことを期待している。

## (1) いわゆる素木標本について

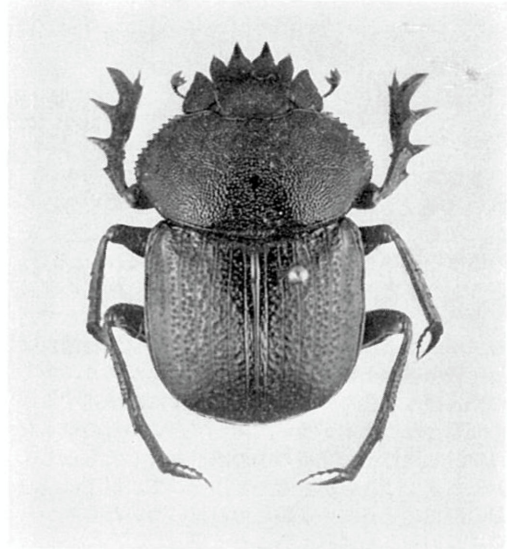
大正5年(1916)、当時の台湾総督府農事試験場技師であった素木得一博士は3年間に亘るロンドン留学を終えて帰国されたが、帰国に際して、膨大な量の日本内地や東南アジア産の甲虫標本を持ち帰られた。日本内地産の標本はかの有名な G. Lewis 氏の採集品で、彼自身や他の甲虫学者によって記載された多くの種類のタイプ標本を含んでおり、それによって後世、台北が日本の甲虫研究のためのメッカ

となり得たものである。また、熱帯アジア産の甲虫標本は、インドからニューギニアに至る各地のものが含まれ、一部はオーストラリア産のものも混っていたと推定される。それらは、一般の蒐集家の好む大型美麗種は余り含まず、むしろ、分類上重要な中型、小型種を広く各科に亘り網羅したものであったと推定するに足る資料がある。これは、恐らく、日本が将来熱帯地域の農業経営に手を染めるであろう時を見越し、台北がその経営の中心地となるであろうことを想定した、その下準備であったであろうと推定されるが、それが素木博士の遠謀深慮によるものか、あるいは、時の日本政府の上部からの指令によるものであったかは、当事者はすべて故人となっており、今となっては知る由もない。また、これらの膨大な標本を素木博士がどのような経緯で入手されたかは、同様に知る由もないが、これらの標本の産地を示すラベルは、素木博士が帰台後、台北においてすべて外され、その代りに、台湾内の特定の数ヶ所の地名を示すラベルが付けられた。これらは、たとえば、インド産のものは恒春、ボルネオ産は紅頭嶼という様に統一されており、ごく一部の限られた人だけがその産地とラベルのからくりを知っていて、当事者だけには、それがどの産地であるかラベルを見ただけでたちどころに判る様にしてあったと聞く。これは外国産の標本だけに限らず、G. Lewis 採集の日本内地産の甲虫標本の一部にも及んでいたと考えられる節がある。この様に大がかりな意識的なラベルの付け替えが、いかなる目的のものになされたかも、やはり知る由もないが、これらの標本が台北にあることを秘匿する目的で行われたと考えても、それは十中八九までは間違いのないであろう。しかし、このラベルの付け替えが、その後に起った思わぬ出来事のために、以後の台湾の甲虫相の解明に大きな混乱を招来し、引いては日本の甲虫相の解明にも大きな障害になろうとは、当の素木博士も夢にも考えておられなかったであろう。

降って、大正11年(1922)、当時台湾に在って浪人中の若き日の加藤正世博士は、素木博士の尽力により、台湾総督府嘉義農事試験場に奉職した。同博士は昭和3年(1928)まで足かけ7年間台湾に滞在されたが、内地にもどるに際し、博士自身の採集品と共にかんがりの量の「素木標本」を持ち出した。その間の経緯についても、「素木標本」の経緯と同様に、私にはどうであったか全く判らない。ただ、加藤博士がこれらの標本をすべて台湾産と信じて全く疑いを持たれなかったことは確かである。同博士が東京に居を移した後、昭和8年(1933)に刊行された同博士著「分類原色日本昆虫図鑑」の甲虫編に当る第



8および9巻に多量の「素木標本」がすべて台湾産として図示されていることによってそれは推定できる。しかし、同博士が甲虫の方には余り詳しくなかったので、同図鑑の中には随所に奇妙な、「頭隠して尻隠さず」式の誤りが散見する。この図鑑は、加藤博士が印刷所に泊り込んで印刷工を督励して刷らせただけあって、当時としては抜群の刷り上りであったが、そのために微小種でも鮮明に写り色彩も鮮かであったのがかえって禍して、「素木標本」を浮き立たせる結果になってしまった。その実例を少々拾ってみよう。まず第8巻では、クワガタムシにはその顕著な例が見当たらないが、第11図版のマダラクワガタはあるいは LEWIS 標本であるかも知れない。もしそうだとすれば、これは恐らくマダラクワガタ *Aesalus asiaticus* LEWIS のタイプ標本である。同図版のキボシハナムグリモドキ *Clinteria spuria* BURMEISTER はアッサムかビルマ産で台湾には産しない。第13図版のグエリンハナムグリ *Protaetia guerini* EYDOUX もフィリピン産で台湾産ではない。第22図版のクロツヤカブトムシ *Dichodontus coronatus* BURMEISTER は実際はビルマからタイ国、マレー半島を経てボルネオに至る地域の産で台湾には産しない。第31図版のチャパネマグソダイコク *Onthophagus austriacus* PANK. は *austriacus* PANZER の誤りで、しかも東ヨーロッパから小アジアを経て中央アジアに至る地域の産で台湾産ではない。第34図版のアシナガマグソコガネ *Sisyphus bouringi* WHITE は中国南部の産。第35図版のコブヒラタコガネ *Gynnopleurus granulatus* FABRICIUS はインド産でおまけに加藤博士が図示するだいで以前から *granulatus* OLIVIER, 1789 のホモニムとされ *G. gemmatus* HAROLD が使われている。第37図版のツノセンチコガネ *Geotrupes sharpi* FAIRMAIRE は台湾特産種になっているが、実際にはタイ国などインドシナ半島特産で台湾産ではない。学名も *Enoplotrupes sharpi* JORDAN et ROTHSCHILD で属名も命名者も異なる。本種をセンチコガネ属 *Geotrupes* にしたのは後にも先にも加藤博士だけであろう。第38図版のナンバンダイコク *Heliocopris midas* FABRICIUS はインド西部からイラン東部にかけての乾燥地の種類である。*Heliocopris* 属の種類はアフリカからインドを経てインドシナ半島、マレー半島からジャワ島に至る乾燥地に分布し、主として象の糞に来る。従って、台湾に産するとしたら極めて不自然である。第39図版コウシュンスカラベ *Scarabaeus erichsoni* HAROLD (第1図参照) は南インドの特産種である。オオタマオシコガネ属 *Scarabaeus* の種類は雨の少ない乾燥地の住人で、台湾の様に雨量の多い地方には棲めない。第40図版のオオクワイロセンチコガネ *Bolboceras calanus* WESTWOOD は南西インドの産で台湾産ではない。*Bolboceras* 属はアフリカ、インド、オーストラリア、南北アメリカなどの乾燥地に多くの種類を産するが、アッサムから東のアジアの多雨地域には1種も産し



第1図：コウシュンスカラベ  
*Scarabaeus erichsoni* HAROLD  
(南インド産) (素木標本ではない)

ない。第50図版のタイワンベニヒラタムシ *Cucujus bicolor* SMITH は「恒春の山地にて獲たもの」とまことしやかな解説までついているが、これはインド北部からネパールにかけてのヒマラヤ山地の特産種で台湾産ではない。恐らくラベルに「恒春」とあったので上記の様な解説が生じたものと思うが、ヒマラヤの2000 m以上の高地に棲む様な種類が「恒春の山地」の様なせいぜい500 m 程度の丘陵地に見出されるわけがない。ここに至って、コウシュンスカラベの例もあり、「素木標本」の中の「恒春」と云うラベルの付いたものは恐らくインドを指しているものであろうと気付くわけである。台湾の高地にもベニヒラタムシ類の1種を産するが、それは日本のエゾベニヒラタムシ *C. opacus* LEWIS に近い種類であり、*bicolor* の様に頭胸部が大きく、青味を帯びるようなことはない。以上は直ちにそれと判る例であるが、其の他にも恐らく「素木標本」であろうと推定される例がかなりある。

次に第9巻になると、「素木標本」の数はさらに目立って来る。まず冒頭の第1図版では、マックリイオオキノコムシ *Triplatomia macleayi* LACORDAIRE とムネモンオオキノコムシ *Encaustes cruenta* MACLEAY は共にインドネシアのスンダランド(ボルネオ、スマトラ、マレー半島、ジャワなど過去の地質時代に一つの大きな陸塊であったと考えられる地域を云う)に分布する種類であり、台湾には産しない。また、同図版のハラビロナガヒラタムシ *Omnia stanleyi* NEWMAN は種類はもち論、属までもオーストラリア特産の生きた化石で、台湾に実際に産するものであったら大問題になる種類である。第6図版のワレスデオキノコムシ *Diatelium*





第2図：ワレスデオキノコムシ  
*Diatellum wallacei* PASCOE (マレー半島産)  
(素木標本ではない)

*wallacei* PASCOE (第2図参照)はろくろ首のお化けみたいなデオキノコムシで、スウェーデンの特産種。もち論、台湾には産するはずもない。本種に限らず、分布域がほぼスウェーデンに限られるのに、中間の地域を飛び越えて台湾に分布すると云う様な分布状況は極めて不自然で、現在の私たちの常識ではとても考えられないが、加藤博士を始め「素木標本」を台湾産として記録した人たちはこの様な点には全く不審の念を懐かず、中には台湾とアンダマン諸島や台湾とニューギニアという様な誰が考えてもおかしな分布をする種類を平然と記録しておられるのは極めて奇怪なことである。第7図版のタカサゴアリツカムシ *Lasinus spinosus* SHARP は、間違いなく SHARP が LEWIS の採集品に基づいて日本から記載した種類で、現在オオトゲアリツカムシと称されている種類と同物であり、台湾産ではない。それなのに、加藤博士は本種を台湾特産種と信じてタカサゴアリツカムシと命名してしまったわけである。同様な例は後述するタカサゴカタビロオサムシにもある。タカサゴ(高砂)は台湾の別名である。このアリツカムシの標本も間違いなく「素木標本」で、LEWIS の採集した本種のタイプ標本の一部と思われるが、恐らくラベルが取り替えられていたものであろう。LEWIS の標本はかなり大きな種類まできれいに展脚して台紙に粘着してある。加藤博士の図鑑を見ていると、日本内地産の小型甲虫のなかに、きれいに展脚されたものと全く展脚されないで脚のぐちゃぐちゃになったものとの2通りのものがあることに気付くであろう、ここに来て、前者のタイプ、すなわち展脚されたものは「素木標本」の中の LEWIS 標本が大部分を占めると推定されるわけであるが、本標本の様に、LEWIS 標本でありながら加藤博士が台湾産と信じていたものがあったということは、先に触れた様に、LEWIS 標本の中にもラベルが「台湾産」に付け替えられたものがあったと推定する根拠とな

るものである。第41図版のヒサゴゴミムシ *Broscoloma elegans* BATES も同様な例である。本種は現在ミヤマヒサゴゴミムシ *B. doenitzi* HAROLD の異名になっているが、間違いなく日本特産種で台湾には産しない。図示された標本は間違いなく LEWIS が採集した *elegans* BATES のタイプ標本である。この図鑑の中の傑作は何と云っても第44図版のタカサゴカタビロオサムシ *Calosoma acuutilis* BATES であろう。カタビロオサムシ属 *Calosoma* の中に *acuutilis* BATES という種類はない。これは *aquatilis* BATES の誤りと思われるが、*aquatilis* BATES はカタビロオサムシ属ではなく、れっきとしたオサムシ属 *Carabus* で、JUNK の甲虫目録では *C. clathratus maacki* MORAWITZ、すなわちマークオサムシの異名となっている。そして、加藤博士の図示した「タカサゴカタビロオサムシ」も正しくマークオサムシそのものである。ご存知の通り、マークオサムシは本州北部の湿地帯に産するが、*aquatilis* BATES の原産地は長野県諏訪湖畔と伝えられており、オサムシ屋の躍起になっての探索にもかかわらず、LEWIS が採集して以来諏訪湖はおろか本州中部からは全く発見されていない。従って、加藤博士の図示された標本は、私の推定が間違っていないければ、恐らく BATES が *aquatilis* を命名するに際して用いた LEWIS 採集の諏訪湖産のタイプ標本に間違いのないと思われる。諏訪湖地方のマークオサムシは現在では前述の様に全く幻の虫となっているが、ここに「諏訪湖産」と思われる LEWIS の採集した標本の写真があることを知っている人は余りいないのではなかろうか。恐らく標本には *C. aquatilis* BATES の同定ラベルが付けてあったのであろう。甲虫に詳しくない加藤博士は、この種類が一見日本のオサムシ類とは余りに異なる形をしているために、*C.* はカタビロオサムシ属 *Calosoma* の略と速断してタカサゴカタビロオサムシという奇妙な新名を付されたものと推定される。ところが、あに計らんや、本種はれっきとした日本内地産で、しかもカタビロオサムシではなかったわけである。同様な例は他にもある。第28図版のタイワンオマダラタマムシ *Chalcophorella smaragdula* OLIVIER がそれである。マダラタマムシ属 *Chalcophorella* は日本のアオマダラタマムシ *C. amabilis* SNELLEN VAN VOLLENHOVEN とクロマダラタマムシ *C. querceti* E. SAUNDERS の2種を含む属で、他には中近東に数種、北米に数種、アフリカに1種を含み、東洋には他に種類がなく、もち論 *smaragdula* OLIVIER という種類もない(現在は日本産の2種は日本特産の *Nipponobuprestis* 属になっているが、当時は *Chalcophorella* 属になっていた)。加藤博士の写真を見てもこの種類は、恐らくモルッカ諸島からニューギニアを経てソロモン諸島にかけて分布する *Chrysodema smaragdula* OLIVIER に当たると思われるが、やはり加藤博士が *C. smaragdula* OLIVIER と付いていた同定ラベルを、一見アオマダラタマムシに似ている

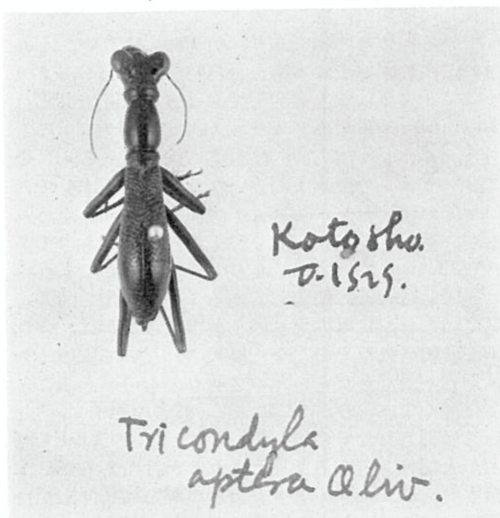


ので、*C.* はマダラタマムシ属 *Chalcophorella* の略と誤って、*Chalcophorella smaragdula* OLIVIER としたものと推定される。本種には幾つかの亜種があるが、写真に示されたものはフィリピンやモルッカ諸島のものではなく、ニューギニア産と推定される。常識的に考えて、台湾産のものが、中間地域を跳び越えてニューギニアと共通の亜種であるなどという馬鹿げたことはない。この点からも図示された標本が「素木標本」であることは充分推定できる。もち論、本種をマダラタマムシ属 *Chalcophorella* に移したのは加藤博士が最初にして最後である。

昭和2年(1927)、内田登一、玉貫光一両氏(実際は玉貫光一氏)は北海道の「札幌」からサッポロクビナガオサムシ *Acoptolabrus sapporensis*、台湾の「奮起湖」からタイワンクビナガオサムシ *Acoptolabrus formosanus* の2新種を記載した。前者は「札幌」となっているが札幌産ではなく、一見エゾマイマイカブリ *Damaster rugipennis* MOTSCHULSKY とオオルリオサムシ *Acoptolabrus gehini* FAIRMAIRE の中間みたいなもので、長い間物議をかもして来たものであるが、現在はオオルリオサムシの1地方型に落ち付き、恐らくは日高地方のどこかの産ではないかと云われている。後者は加藤博士から贈られた台湾の「奮起湖」(阿里山の西麓)産と称する1頭のボロボロの雌によって記載されたもので、後日、昭和13年(1938)に三輪勇四郎博士が、佐渡島から LEWIS によって記載されたサドマイマイカブリ *Damaster capito* LEWIS, 1881 に他ならないことを考証して大問題になった。もち論、マイマイカブリの様に後翅のない地上性の甲虫では、佐渡島と台湾の様に遠く距った島に共通した種類を産するという様な例は考えられない。三輪博士はその時すでにこの標本は「素木標本」であることを知っておられたと思われるが、婉曲にサドカブリの台湾に産することを否定された。これに対して、加藤博士は「この標本は奮起湖駐在の1巡査が虫が好きで、内地産の標本を沢山持っていたので、その中からもらったものの一部である」と苦しい弁解をしているが、これも「素木標本」であることは間違いない。もしそうだとすれば、この標本は LEWIS がサドマイマイカブリを記載するに当り用いた模式標本の中の1頭であることはほぼ確実である。玉貫氏は台湾産ということだけで、ろくに検討することなく、サドマイマイカブリ、しかもそのタイプ標本に対して、新種、しかも極東の北部のごく限られた地域にだけ分布するクビナガオサムシ属 *Acoptolabrus* の新種として二重の命名をして二重三重の誤りを犯してしまったわけである。なんたるお粗末! しかし、「素木標本」の存在を知らずに、それらが LEWIS の採集した日本産の種類のタイプ標本の一部を含んでいるなどとは夢にも考えることなく、これらのタイプ標本に二重の命名をした例が他にも幾つかあるが、それらについては後に詳しく述べることにする。なお、9巻にはこの他にも多くの「素木標

本」と思われる標本の写真があるがここでは詳述を避ける。

話変わって、大正14年(1925)、旧制中学を卒業した鹿野忠雄少年は台湾の山と自然に憧れて、創立されたばかりの旧制台北高等学校に入学した。以来、台湾の山ばかり駆け廻り学校の授業をすぼかすことが多かったのも、彼が辛うじて卒業できたのは昭和4年(1929)であった。しかし、さらに1年浪人して台湾にあったため、彼が東京帝国大学に入学して東京にもどったのは翌年の昭和5年(1930)であった。この台湾に在った5年間に鹿野博士は当然農事試験場の素木博士の許に出入りしたと思われるが、彼もやはり、かなりの量の「素木標本」を持ち出した。現在国立科学博物館にある「鹿野標本」の中には一見してそれと判る標本がかなり存在する。しかし、鹿野博士が明らかに「素木標本」に基づいて台湾より記録したと思われる種類でも「鹿野標本」の中に見当たらない種類も少なくない。鹿野博士は加藤博士とは異なって甲虫の専門家である。加藤博士は彼の図鑑の中で「素木標本」を台湾産と信じて掲載しただけで、正式の記録はしていないが、鹿野博士は「素木標本」の中のラベルを「台湾産」に取り替えた標本をすべてそのままに信じこみ、それぞれ専門の雑誌にあたかも鹿野博士自身の採集品であるかの様にして報告してしまった。たとえば、紅頭嶼より昭和4年(1929)に記録したコウトウハネナシハンミョウ *Tricondyla aptera* OLIVIER (フィリピンからニューギニアにかけて分布) (第3図参照)、コウトウメダカハンミョウ *Therates labiatus* FABRICIUS (フィリピンから小スンダ諸島、ニューギニアにかけて広く分布)、アイイロハンミョウ *Prothyma proxima* CHAUDOIR (インド産)、コウトウヤツボンハンミョウ *Cicindela conspicius* SCHAUM



第3図: コウトウハネナシハンミョウ  
*Tricondyla aptera* OLIVIER  
(鹿野標本とそのラベルを示す)



(フィリピン特産種), コウトウカワラハンミョウ *Cicindela decemguttata* FABRICIUS (ニューギニアを中心にモルッカ諸島, セレベス, 小スンダ諸島, ビスマルク諸島, ソロモン諸島などに広く分布), ヨコミスジハンミョウ *Cicindela dives* GORY (南インド産), コウトウコニワハンミョウ *Cicindela fuliginosa* DEJEAN (インドシナ半島からマレー半島を経てスダラントに分布), ムラサキアオカミキリ *Aphrodisium semiignitum* CHEVROLAT (フィリピン特産), ヒゲナガアオカミキリ *Chloridolum cinnyris* PASCOE (ビルマからスダラントにかけて分布), 其他カミキリムシ類10余種, 昭和6年(1931)に同じく紅頭嶼から記録した, ドリアカタビロオオキノコムシ *Aulacochilus doriae* BEDEL (スダラント特産), コウトウカタビロオオキノコムシ *A. humeralis* WATERHOUSE (フィリピン特産), ヨツクロボシオオキノコムシ *Spondotriplax endomyoides* CROUCH (ボルネオ特産), ムルトンマルガタオオキノコムシ *Cyrtomorphus moultoni* KUHN (ボルネオ特産), ベンガルマルガタオオキノコムシ *C. bengalensis* GUERIN-MÉNÉVILLE (インドからスダラントにかけて分布), キボシエグリオオキノコムシ *Megalodacne luteoguttata* CROUCH (スマトラ特産), フィリピンエグリオオキノコムシ *M. philippinarum* LACORDAIRE (フィリピン特産), メルビユツヤオオキノコムシ *Coptengis melvillei* WATERHOUSE (ニューギニア産) などがある。また, 昭和3年(1928)に台湾本島から記録したマックリーオオキノコムシ *Encaustes cruenta* McLEAY (スダラントからインドシナ半島にかけて分布) コウシュンカタビロオオキノコムシ *Aulacochilus quadripustulatus* FABRICIUS (インドからインドシナ半島を経てスダラントに分布), クライロケブカオオキノコムシ *Trichulus pubescens* CROUCH (セイロン島特産), インドベニオビテントウダマシ *Brachytrycherus madurensis* ARROW (南インド産), ヘリビロオオテントウダマシ *Eumorphus marginatus* FABRICIUS (スダラント産), インドヒラタテントウダマシ *Indalmus indicus* GORHAM (インド産), カービーヒラタテントウダマシ *I. kirbyanus* LATREILLE (インド産), キバネケナンテントウダマシ *Atrichonota flavipennis* ARROW (ビルマ産) などもそうである。この他カミキリムシ科にも多く, 鹿野博士が記録されて以来全く記録のない東洋熱帯産の種類のほとんど「素木標本」と見做して差支えないであろう。また, 日本内地から LEWIS の採集品に基づいて BATES が記載した種類もかなり台湾から鹿野博士によって記録されているが, これもほとんどが「素木標本」と考えてよいであろう。鹿野忠雄博士と云えば, ワレス線を紅頭嶼と台湾本島との間に延長し, 紅頭嶼をフィリピン諸島と共にワラセアに含めた分布地理学者として余りにも有名であるが, その有名な鹿野博士が, 紅頭嶼に隣接するフィリピンや台湾本島に産する種類ならいざ

らず, これらの地域を跳び越えて, ボルネオなどのスダラントやインドシナ半島に見られる種類を何の疑問も持たずに紅頭嶼から記録したことに私は強い不自然さを感じる。ましてや, 遠く距ったニューギニア産の種類を紅頭嶼から記録したり, セイロン島特産の種類を台湾本島のそれも太平山の様な北部の山地から記録することに全く疑問を感じなかったとすれば, 当時は現在とは異なってその様なことに矛盾を感じない時代であったかも知れないが, それにしても余りにも無神経と云わざるを得ない。

鹿野博士も「素木標本」の存在を知らなかったために二重記載の誤りを犯している。昭和4年(1929)彼は日本内地から3種と沖縄本島から1種, 計4種のタマムシの新種を記載した。このうち, 上高地から記載したカミコウチナカボソタマムシ *Coraebus kamikochianus* KANO (後に LEWIS の記載したルイスナカボソタマムシ *C. rusticus* LEWIS, 1892 のシノニムとなったが, 模式標本は「LEWIS 標本」ではないと思われる)と坂口総一郎氏採集品に基づいて沖縄本島から記載したオキナワナカボソタマムシ *Coraebus lochooanus* KANO の2種は問題がないが, MAKOTO MASUDA 氏が「Shinano Province」で採集したという標本に基づいて記載したシナノムツボソタマムシ *Chrysobothris shinanensis* KANO とマダダクロホソタマムシ *Poecilnota masudai* KANO の2種には以下に記す様な問題がある。

すなわち, シナノムツボソタマムシ *Chrysobothris shinanensis* KANO は中国浙江省上海産の1♂に基づいて記載された *Chrysobothris pieli* THÉRY, 1940 の記載に一致する。鹿野標本中にある模式標本には「*Chrysobothris shinanoensis* KANO, sp. nov.」(原文のまま)のラベルが付いているだけで産地其他を示すラベルは全くない。しかも, 針などから推定するとこれも「素木標本」と考えなければならぬ。この様な種類が本州中部の高地と中国に共通して産するとは考え難く, その後本種が日本で採れたという話も聞かないので, 本種の分布から日本は除かれねばならない。本種は間違いなく「支那のムツボソタマムシ」であったわけである。この場合問題になるのは種名で, THÉRY の記載は1940年に発表されたものであるから, 誤った産地から記載されたものではあるが, 当然本種の種名には *Chrysobothris shinanensis* KANO, 1929 が残されなければならない。

一方, マダダクロホソタマムシ *Poecilnota masudai* KANO の模式標本にも「*Poecilnota masudai* KANO」のラベルが1枚付いているだけで其他のラベルは一切ない。北海道帝国大学農学部の松村松年先生は, LEWIS の記載した *Poecilnota vivata* を, この種類が北海道に産しないことに気付かず, 北海道に産するよく似た別種 *P. virgata* MOTSCHULSKY に無理矢理に *P. vivata* LEWIS の学名を当て, 和名をクロホソタマムシとした。鹿野博士は真の *vivata* も *virgata* も知らずに, 松村博士



のクロホシタマムシを *P. vivata* LEWIS と信じ込み、真の *vivata* LEWIS の標本、それも恐らく「素木標本」に由来する *vivata* LEWIS の模式標本の一つに重ねて *Poecilnota masudai* KANO という新名を与えてしまったわけである。鹿野博士が *masudai* の原記載の中で “One specimen of this new insect was collected in the Province of Shinano, by Mr. MAKOTO MASUDA who kindly sent it to me to examine.” と述べている MAKOTO MASUDA なる人物については誰であるか全く判らないが、或いは架空の人物ではないかとも推定される。

さらに降って、昭和3年(1928)、北海道帝国大学農学部大学院に在学中の三輪勇四郎博士は大学院在学のまま台北帝国大学理農学部昆虫学教室に勤務することになり、11月に台北に赴任し、翌昭和4年(1929)9月台湾総督府中央研究所農業部技師に任ぜられた。以来、終戦の翌年の昭和21年(1946)4月に日本に引き揚げるまでの18年間に後輩の中条道夫、水戸野武夫両氏を育て、共に甲虫の研究に従事し、同研究所が当時の日本における甲虫研究の中心となる礎を築いた。同博士は赴任後間もなくより続々と甲虫に関する研究論文を発表されたが、少なくとも最初の数年間は「素木標本」を全部台湾産と信じておられたらしく、昭和6年(1931)に刊行された「台湾産昆虫分類目録(鞘翅目)」(台湾総督府中央研究所農業部報告, 55)の中には「素木標本」に基づく、恐らくは台湾には産しないと思われる多くの種類を記録し、混乱に拍車をかけることになった。三輪博士は昭和6~9年(1931~34)に「大日本織形虫科の種の研究」(1)~(5)を発表しておられるが、その(2)の中でタテヅノマルバネクワガタ *Neolucanus saundersi* PARRY に関して次の様に興味深い記述をしておられる。「筆者去大正十五年台湾へ来遊の節当標本館に蔵せる本種を調査し *Insecta* Matsumurana III. に報じたり、即当時の標本は体長約60mmあり、太平山産の雄にして素木技師1923年8月の採集なりき。其後当所に奉職せる節該標本は見当らず。当時の sketch を基礎とし LEUTHNER (1885) 氏の図を参考として Fig. 10 の1を作れり。」以後タテヅノマルバネクワガタ *Neolucanus saundersi* PARRY は台湾のクワガタムシに仲間入りし、どの目録にも認められる様になったが、実際には、三輪博士が台湾より記録して以来、台湾からは正確な記録が全くなく、台湾産のタテヅノマルバネクワガタと称する標本はすべてオオマルバネクワガタ *Neolucanus vendli* DUDICH の同定誤りで、私は台湾産のタテヅノマルバネクワガタの標本を見たことがない。恐らく、三輪博士が大正15年(1926)には見たが昭和3年(1928)に赴任した折には見当らなかったと述べられた標本も「素木標本」で、恐らく昭和3年には誰かに持ち出されてしまった後だったのであろう。しかし、これには疑問がないわけではない。それは、三輪博士が述べておられる標本の採集日が「1923年8月」である点である。素木博

士がヨーロッパから帰台されたのが大正5年(1916)であるから、それから数年かかって「素木標本」のラベルの付け替えがなされたとしても、1923年(大正12年)までには7年もある。ラベルの付け替えがその様な長期間に亘るはずはないと考えられる。しかし、この点に難点はあるものの、三輪博士が1926年に始めて台湾からタテヅノマルバネクワガタを記録されて以来、台湾のクワガタはあれ程よく調べられているのに、本種の様な大型種が1度も採集されたことがなく、そのうえ、その標本が1928年にはすでに行方不明になっていたということは、やはり、その標本が「素木標本」の一つであって、1928年にはすでに誰かによって持ち去られていたのではないかとこの考え方の有力な傍証となるであろう。

三輪博士もやはり「素木標本」の存在に気付かず、玉貫氏や鹿野博士と同様に二重記載の誤りを犯しておられる。昭和10年(1935)、三輪勇四郎、中条道夫両氏は台湾の李棟山(恐らく新竹県と苗栗県の県境の李棟山のことと思われる)からカワカミアオタマムシ *Eurythyrea kawakamii* MIWA et CHŪJŌ を記載した。この記載の付図を見ると、その色は実に美しいが、小楯板は三角形で、翅端が矢筈状に開いている。*Eurythyrea* 属の特徴は大きな楕円形の小楯板にあるが、図の様な三角形ならこれはムツボシタマムシ族 *Actenodini* の特徴である。この点については記載の中に小楯板は楕円形と明記してあるので図が誤りでいい加減なものであることが知れるが、特異な翅端の形にはだまされて来た。アオタマムシ属はヨーロッパに4種、中央アジアに1種、極東に3種を産するが、翅端の形がそれぞれ異なり種を分つ有力な区別点となる。ところが、カワカミアオタマムシの様な矢筈状の特徴のある形をした種類は全く見当らない。私は台湾には素晴らしいアオタマムシがいると考えて疑わなかった。しかし、1965年渡台して台北農事試験場にある模式標本を実際に見て仰天した。何とその翅端は日本のアオタマムシ *E. tenuistriata* LEWIS と全く同様に斜に刳られていたのである。それはアオタマムシ *E. tenuistriata* LEWIS そのものであったのである。この誤りの源も松村松年博士まで遡らなければならない。明治39年(1906)、松村博士は「日本千虫図解」第3巻にアオタマムシ *E. tenuistriata* LEWIS を図示したが、これは北海道産の甲虫に無理に LEWIS の記載した種名を当てたため、真のアオタマムシではなく、北海道に産するエゾアオタマムシ *E. eoa* SEMENOV を誤認したものであった。北海道帝国大学を卒業された三輪博士は松村博士の扱いに従い、エゾアオタマムシを真の *E. tenuistriata* LEWIS と信じておられたので、それとは異なる、「台湾産」の真の *tenuistriata* を新種と考え、*kawakamii* と命名されたのであろう。それではアオタマムシ *E. tenuistriata* LEWIS は果して台湾に産するのであろうか? アオタマムシ属は先に記した様に中央アジアからヨーロッパにかけて5種、日本とウッスリーに3種、合計



8種が知られているが、その東の分布は日本海周辺の地域に限られ、大陸ではウッスリーだけから知られ、中国領土の全域、モンゴル、シベリアのどこからも全く知られていない。従って、台湾に産するとすれば、極めて異例のことであり、当然日本とは別種を産するはずである。日本と同種を産するという様なことは極めてあり得べからざることである。しかも、台湾からはその後全く記録がない。従って、このカワカミアオタマムシ *E. kawakamii* Miwa の模式標本も十中八九までは「素木標本」と断定してよいであろう。これを「素木標本」とすると、ここに面白い事実が現れて来る。LEWIS のアオタマムシ *Eurythyrea tenuistriata* の原記載には "I have an example from Atami and another from Chichibu. There is a small specimen in the British Museum from Nikko." とある。これによる限り、大英博物館には LEWIS の蒐集した熱海産の1頭と秩父産の1頭の他に日光産の小型の1頭、計3頭があるはずである。しかるに、私が1973年に大英博物館で調べた限りでは、大英博物館には "Syntype" と指定された "Chichibu" 産の1♀、同じく "Syntype" に指定された Atami 産の1♀の計2頭があるだけで、他にあるはずの "Nikko" 産の小型の1頭は見当らなかつた。恐らく、この推定が許されるならば、この小型の Nikko 産の1頭がカワカミアオタマムシの模式標本に化けたのであろう。私の記憶に間違いなければ、カワカミアオタマムシの模式標本も小型の雄であったと記憶する。従って、「素木標本」の中の日本本土産の標本は「LEWIS 標本」ばかりに限られてはいなかったと考えなければならない。

以上で、「素木標本」の概要とその及ぼした意外な影響について記したが、その事実が未だに公表されていないので、その影響は現在に至るもなお続いていると考えなければならない。ところで、当時台湾におられた三輪勇四郎博士、中条道夫博士、水戸野武夫氏らの甲虫学者は昭和10年頃には「素木標本」の大要について気付いておられたのではないかと考えられる。昭和11年(1936)に刊行された「日本動物分類」第10巻第8編、第4号斑蝥科(ハンミョウ科)の中で三輪勇四郎博士は「従来発表せられた種類のうちコウトウハネナシハンミョウ *Tricondyla aptera* OLIVIER, アイイロハンミョウ *Prothyma proxima* CHAUDOIRE, コウトウメダカハンミョウ *Therates labiatus* FABRICIUS, コウトウヤツボンハンミョウ *Cicindela conspiciua* SCHAUM, コウトウカラハンミョウ *Cicindela decemguttata* FABRICIUS, ヨコミスジハンミョウ *Cicindela dives* GORY, コウトウコニワハンミョウ *Cicindela fuliginosa* DEJEAN の7種は調査の結果帝国版図内に産する事実の甚だ疑わしい種類である。また、たとえ産すると為すも自然的には極めて稀有の事実であって、現在までの調査によれば紅頭嶼における自然的分布を否定すべきものと認める。従って、本書においては之等の種類の説明をすべて省略した。」と意味深長な記述をし、「素木標本」に該当すると思

われる種類の台湾からの記録をすべて抹消しておられる。一方、中条博士はやはり昭和11年(1936)に刊行された同じ「日本動物分類」第10巻第8編第5号、大韋虫科(オオキノコムシ科)と昭和14年(1939)刊の第12号、偽瓢虫科(テントウムシダマシ科)の中で、これら「素木標本」に基づいてなされた記録を「台湾産の標本は見たことがないが」と断りながら、その記録者と出典を明らかにした上で、「原産地産」の標本に基づいて図示しておられる。また、水戸野武夫氏は昭和15年(1940)に刊行された「日本産鞘翅目分類目録」第8号天牛科(カミキリムシ科)において、「素木標本」に基づくと思われる記録にだけその記録者と出典を掲げておられる。これらの点を考慮すると、これらの方々は少なくとも三輪博士のハンミョウ科が刊行された昭和11年(1936)10月以前、カワカミアオタマムシの発表された昭和10年7月以後の約1ヶ年余の間に「素木標本」の存在に気付かれたことになる。従って、これ以後は在台湾の学者による「素木標本」に基づく誤りは繰り返されることはなくなった。しかし、上記の様な二重命名の過ちは以後の日本の甲虫界にも混乱を惹起し、それらが正しく訂正されたのはタマムシに関しては今回が最初である。

なお、これは余談であるが、台湾の甲虫界の混乱に拍車をかけたもう一つの事実がある。それは、「素木標本」とは無関係で、無意識に惹起されたものではあるが、矢野由雄氏の誤りに基づくものである。同氏は戦前における屈指の甲虫採集家で、氏自身もオサムシ科(広義のオサムシ科でゴミムシ科なども含む)の大蒐集家であったが、余りに多くの地域で多量の甲虫を採り過ぎたために、産地に多少の誤りがある。台湾産の標本の中にもフィリピン産の標本が一部混入し、そのために思わぬ混乱を惹き起した。昭和16年(1941)、東京の篠原竜雄氏は台湾の嘉義付近の大坑山産の標本に基づきニッポンオオキノコムシ *Encaustes nipponica* SHINOHARA を記載した(昆虫界, 91, pp. 613~614, pl. 1)。しかし、これはフィリピン産のすでに命名されている種類であるという。これはオオキノコムシの専門家であった故荒木東次氏より直接聞いた話であるから間違いはないと思う。矢野氏の標本では私も痛い目にあった経験がある。同氏の中国山東省嶗山での採集品の中にヨーロッパ産のタマムシが数頭混っていたのである。これに気付かず、私は1954年にヨーロッパの東北部からソ聯にかけて産するフタオタマムシの1種 *Dicerca moesta* (FABRICIUS, 1793) を山東省の嶗山から記録した(国立科学博物館研究報告, 1, p. 32)が、これは恐らくはチェコスロバキアあたりの標本が紛れ込んでいたのではないかと推定され、中国産のものではなかった。この機会にこの *D. moesta* の記録を取り消しておく。

以上、本題のアオカミキリから外れて、長々と「素木標本」とその影響について記したが、これは実際に起ったことを事実に基づいて推定したものであって、私の創作ではない。(国立科学博物館)

## 日本新記録のシデムシ(2)

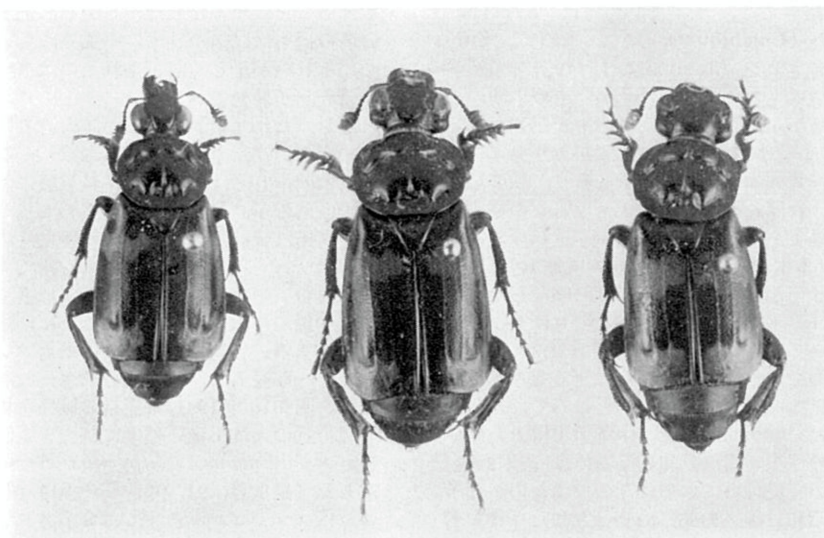
黒沢良彦

本誌19/20号(1974)誌上で私は八重山諸島の石垣島からアカモンオオモボトシデムシ *Diamesus osculans* (VIGORS, 1825) を記録したが、そのずっと以前、1964年に沖縄本島で私自身で採集したモンシデムシの1種が実は日本未記録の種類であったことに最近になってやっと気付いたので、遅れ馳せながら以下に記録したい。

ネパールモンシデムシ *Nicrophorus nepalensis* HOPE, 1841, 1♀, 沖縄本島国頭村与那(琉球大学演習林), 24. iii. 1964, 黒沢良彦採集。

ヒマラヤから、インド東部、アッサム、ビルマ、中国中部および南部、台湾を結ぶ地域から南、インドシナ半島、マレー半島を経てスマトラ、ボルネオ、

ジャワ、フロレス島に至る地域に広く分布する種類であるが、熱帯地方では主として高地に産する。私は台湾と、まだ記録はないが、フィリピンのルソン島北部の高地で採集した。本種はモンシデムシ属 *Nicrophorus* FABRICIUS, 1775 の中ではマエモンシデムシ群 *maculifrons* group に属する。この群に属するモンシデムシは、日本本土にマエモンシデムシ *N. maculifrons* KRAATZ, 1877, カラフトマエモンシデムシ *N. karafutonis* KONO, 1929, ヨツボシモンシデムシ *N. quadripunctatus* KRAATZ, 1877 の3種を産するが、本種はマエモンシデムシとカラフトマエモンシデムシとは翅鞘の4個の橙色紋の中に各1個の黒点紋を遊離する点で異なる。



日本産マエモンシデムシ類 左：ネパールモンシデムシ *N. nepalensis* HOPE (沖縄本島産)；中：マエモンシデムシ *N. maculifrons* KRAATZ (本州産)；右：ヨツボシモンシデムシ *N. quadripunctatus* KRAATZ (本州産)。

この点でヨツボシモンシデムシに一致するが、橙色紋の形はマエモンシデムシに一致し、後種の様に後方の紋が相接して翅端部の全部を占めることがなく、会合部は黒く両紋が相接することがない点で区別される。また同じくマエモンシデムシ群に属するシベリア東部や満州産の *N. maculiceps* JAKOWLEW, 1923 やボルネオの *N. podagricus* PORTE-

VIN, 1920 ともやはりマエモンシデムシと同様の相異点で区別できる。ただし、これらの種類がそれぞれに独立した種類であるのか、あるいは1種または数種の地方変異であるのか、検した標本が少ないので何とも云えない。G. PORTEVAN の示した相異点ではいずれの種類も変異幅が大きく、明確な区別は不可能である。(国立科学博物館)

## ○ニセクチブトコメツキの北海道における採集例

ニセクチブトコメツキ *Lanecarus palustris* (LEWIS) は本州・九州が分布地として知られているが、筆者の1人松本は北海道から得ているのでここ

に報告しておく。

1♂, 北海道, 上ノ国町湯ノ岱, 24. vii. 1978, 松本俊信採集。

(東京農大, 鈴木 互・松本俊信)



○ホソハンミョウの北海道における記録

ホソハンミョウ *Cicindela (Eugrapha) gracilis* PALLAS は本邦においては本州、四国および九州に分布するが、北海道からは記録されていないと思われる。筆者らは北海道旭川市東鷹栖において本種を採集しているので報告する。

2♀♀, 7. viii. 1970; 1♂, 2♀♀, 8. viii. 1971; 1♂, 2♀♀, 8. viii. 1972; 1♂. 21. viii. 1973; 1♀, 3. viii. 1975; 1♀, 16. viii. 1977; 12♂♂, 15♀♀, 28. vii. 1979. 松本英明・松本俊信採集。採集地は丘陵にある墓地内で、採集個体は少ないが、実際にはかなりの数の個体が見られた。

また、本種の飛翔の観察例は少ないが、1972年の採集では多くの飛翔する(3~4m)個体が見られ捕虫網を使って採集した。

末筆ながら御指導下さった東京農業大学の岡島秀治博士に深謝する。

(旭川市, 松本英明; 東京農大, 松本俊信)

○*Phloeobius stemus* JORDAN の八丈島での記録

本種はこれまでに本州、四国、九州、御蔵島、石垣島から記録されているが、筆者の手許に八丈島産の標本があるので、報告しておく。

1♂, 末吉, 14. vii. 1976, 有本久之採集; 1♂, 末吉, 15. vii. 1976, 桑原幸男採集; 1♀, 末吉, 17. vii. 1976, 森 康真採集。

他に詳しい地名は不明であるが、八丈島とだけラベルに記録されている標本があるので併せて報告しておく。

1♂, 八丈島, 2. vii. 1976, 楠井善久採集。

なお、末筆ながら上記の標本を提供して下さい下さった採集者の方々に深く感謝する。

(和歌山県湯浅町, 的場 績)

○ヒメコブスジコガネをクマの糞より採集

ヒメコブスジコガネ *Trox opacotuberculatus* MOTSCHULSKY は、従来モグラ等の小型哺乳類の死体に来ることが知られていたが、筆者は日陰の古いクマの糞と思われるものから採集した。この糞の表面はかなり乾燥していたが、地面と接する部分はネリアン状で、そこにニッコウコエンマコガネ *Caccobius nikkoensis* (LEWIS) 14頭と共に2頭がもぐり込んでいた。

2頭, 神奈川県清川村札掛, 8. v. 1980, 筆者採集。

コブスジコガネ類は多くが食屍性であるが、糞から得られたものとしては、ヘリトゲコブスジコガネ *T. mandli* BALTHASAR が犬糞から(添野光一, インセクト, 26(1): 40, 1975), また西表島から記録された *Trox* sp. がイリオモテヤマネコの糞から採集されている(山屋茂人, 昆虫と自然, 14(14): 24-25, 1979) が、本種のこの様な例は知られていないと思われる。(神奈川県座間市, 西川正明)

討 報

本会々員、白畑孝太郎氏は本年(1980)5月20日午前2時、山形県酒田市のお家で胃癌のため不帰の客となられた。享年66才、まことに悲しい限りで、ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福を祈るものである。

氏は旧姓鈴木孝太郎、山形県上山市の生れで、戦前から「昆虫界」「昆虫世界」などの誌上で活躍しておられる。山形県酒田市警察に奉職し「昆虫のお巡りさん」として夙に有名であった。戦時中二度に亘り応召され、中国の山西省と湖北、湖南両省で辛酸を嘗められながら多くの貴重な標本を齎された。また、昭和43年(1968)以来山形県総合学術調査会の調査員として昆虫関係を分担し、同会出版の「朝日連峰」を始めとする6冊の総合調査報告書には幹事役として出版に尽力されると共にすべての報告書に執筆しておられる。昭和53年(1978)より継続されている最上川の調査にも卒先して参加されておられたが、来年完成予定のその報告書の完成を見ずに他界されたことは惜しみても余りある。氏の足跡は主として山形県および周辺の諸県に限られていて、甲虫は言うに及ばず、他のすべての目に及び綿密に採集観察しておられ、その知識の深さは驚嘆すべきものがあつた。最近では仙台の渡辺徳氏と共に能登半島、四国、紀伊半島、五島列島、甌歯諸島などに主としてオサムシを目的とした採集に遠征をされていた。氏の主な興味は甲虫ではハンミョウ科、他目ではトンボ類、直翅目などであつたが、上記の如く、昆虫のほとんどすべての目に亘って極めて博識であつた。その点でも稀有の昆虫愛好家と称されるであろう。

本会には、昭和43年(1968)にそれまで京浜地方を中心とした関東地方だけに会員を限っていた本会が全国組織に改め会誌を発行する様になった時以来会員として会の発展に貢献して来られ、本誌にも数回投稿しておられる。

私とは、私が中学5年生の時(1938)以来実に42年に亘るおつき合いで、共に山野を跋涉したことも数知れず、お宅に泊り込んで深夜まで語り明かすことも多く、現在の私の頭の中には、氏から教えられた多くの知識と氏の思い出が錯綜して蓄積している。今年もまた最上川の調査で行を共にすることになっており、その機を楽しみにしておつた折の突然の訃報でただ呆然とするのみである。昨年11月に大阪で拝顔した折には病の気配だに見えぬお元氣な姿だったのにと氏とはすでに幽明境を異にする身となつてしまったことが未だに信ぜられぬこの頃である。衷心よりご冥福を祈りたい。(黒沢良彦)

## =＜新著紹介＞=

IABLOKOFF-KHNZORIAN, S.M., 1979. Genera der paläarktischen Coccinellini (Coleoptera, Coccinellidae). Ent. Blätt. 75: 37-75.

Coccinellini 族 (Psalloborini 族を含む) というのはテントウムシ科のうち、中・大形の色彩斑紋の変化に富み、光沢のある、いかにもテントウらしい1群である。種は斑紋や点刻によって区別し、構造が顕著に異なると属を分けてしまうという傾向があり、細分化されている。それは、テントウムシ科分類のバイブル的存在の MULSANT (1846, '50, '66) に責任がある。彼はこの類を53属に分けた。その業績を批判的に再検討した CROTCH (1874) はかなり整理したものの、自ら24属を追加し66属とした。その後、属の取扱についてはあまり大きな変化はなかったが、TIMBERLAKE (1943) は雄交尾器の構造を重視し、12新属を創設した。この類の種の分類は、極端な遺伝的多型にまどわされないように注意すれば、一部の厄介な群を除き割合容易であるが、属の問題は大変混乱しており、だれかが大整理する必要にせまられていた。ここに紹介する論文は表題のとおり旧北区のものに限られるが、上記のような意味から大変貴重である。まず、族の特徴をあげ、属間の系統問題を論じたあと、詳しい14頁にわたる属・亜属への検索表を掲げ、旧北区に産する種とそのシノニムのリストを付している。結果として42属19亜属(1新属4新亜属を含む)に分類し、新たにシノニムとしたもの8属である。また、種のリストの所で、従来までの種をシノニムとして落したのも相当数に及ぶ。分類の根拠として、一般形態のほか、雌雄の交尾器や、内部生殖器の硬化部分を重視している。たくさん種の所属が変更されており、その処置をそのまま無批判に受入れてよいものか疑問もあるが、それらは今後検討を要すると思われる。とりあえず、以下に、学名が変更された日本の種と、特に重要な取扱について記しておくたい。

1. カサイテントウ *Myzia ramosa* (FALDERMANN, 1833) → *Sospita (Myzia) gebleri* (CROTCH, 1874).
2. ジュウロクホシテントウ *Myzia nipponica* (YUASA, 1963) → *Sospita (Myzia) oblongoguttata* の亜種。
3. *Anisocalvia* 属を *Calvia* 属の亜属とし、*Eo-*

*caria* 属を *Anisocalvia* 亜属のシノニムとする。その結果、ジュウニホシテントウ、シロジュウシホシテントウ、シロジュウゴホシテントウ、ムーアシロホシテントウの属名が変わる。また、アマミシロホシテントウ *E. parvinoxata* MIYATAKE, 1959 を *muiroi* のシノニムに、ジュウニホシテントウ日本亜種 *yusai* (NAKANE, 1954) を原種のシノニムとする。

4. *Artemis*, *Cyphocaria*, *Spilocaria* 各属 → *Lemnia* 属の亜属。
5. *Parippodamia* (subg. n.), *Adoxia*, *Ceratomegilla*, *Asemiadalia*, *Semiadalia* → いずれも *Hippodamia* 属の亜属。
6. 日本のナナホシテントウは亜種 *brucki* とされることが多かったが、原種と区別する必要なし。
7. *Aza*, *Synharmonia*, *Protocaria*, *Gyrocaria*, *Pseudoharmonia* 各属 → *Oenopia* 属のシノニム。その結果、ウスキホシテントウ、ムツキボシテントウの属名が変わる。
8. ルイステントウ *Adalia conglomerata* L. を模式種として *Adaliomorpha* 亜属を設定。
9. ナガカメノコテントウ *Aiolocaria milabilis* (MOTSCHULSKY, 1860) → カメノコテントウ *A. hexaspilota* (HOPE, 1831) のシノニム。

以上のように大幅な変更がなされたが、中には、例えばアマミシロホシテントウは明らかに独立種であり、容認できかねるものもある。また、台湾産のものまで広げるとさらに多くの変更がなされている。(福井大学、佐々治寛之)

## =＜連絡・報告＞=

本誌の発行も本号で50号を数えることになりました。丁度切りの良い数字でもあり、また、これまでの会員諸兄姉の御協力に対する感謝の意をもこめて増大号と致しました。今後とも宜敷し御支援のほどをお願い致します。(世話人一同)

## 甲虫談話会

会費(一カ年)1500円、次号は10月30日発行予定、投稿〆切は9月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内

## 昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

## タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

## タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479